

だから中国が言う「正しい歴史認識」についての「歴史認識」については、私は一貫して「逆観」「逆聴」「逆読」を薦めている。それは、決してただの逆説的言辞からではない。その嘘はそれなりに目的をもって言われているからだ。中国では政治的目的をもっていくらかでも嘘の歴史を創るのだ。嘘の歴史について、騙されないでその真実を知るためには、中国の政治目的を見破る以外にはない。

第二章 中華文明の原理

一・中華文明の淵源としての黄河文明

中華文明は、黄河の中下流の中原で生まれた黄河文明を淵源とした文明であるといつてよいであろう。大河の周りで農業が盛んとなり、一つの巨大な権力の下に、国家生活とも呼ぶべき巨大な共同生活体が生まれ、それを古代文明と呼んだことは、他の三つの古代文明（メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明）と共通している。

農業を中心に、大勢の人が一つの秩序の下に共同生活する四大文明の中で、黄河文明以外はその後、後進の新たな文明の誕生の下に滅び、その後その古代文明を直接継続して引き継ぐ文明は存在しない。が、黄河文明のみは引き継がれて、現在の中華文明にまで発展している。その大きな要因は、誕生した時点で北方に戦争に強い騎馬遊牧民がおり、この騎馬遊牧民と絶えず戦争が続き、その過程で、周辺の他の文明、例えば長江流域に先行していた長江文明も飲み込む形で、絶えず拡大を続け、現在の中華文明に発展したと言えるからである。この点で、黄河文明は他の三つの古代文明と異なる。

繰り返すが、黄河文明はその北に夷狄と呼ばれる騎馬遊牧民がいた。この遊牧民が絶えず黄河文明の主体である農耕民を襲った。騎馬民族であるから戦争は強く、農耕民は鉄砲や大砲が開発されるまで負け続けていた。しかし滅びはしなかった。遊牧民は広域を移動し、文明の運

び屋にはなるが、定住しないから、巨大な文明を作ることはできない。だが農耕によって成り立つ文明は、巨大な人口で共同生活をする、巨大な共同生活体になる。つまり経常的に政治を行う権力の存在する国家になる。そして巨大な国家生活をするためには、租税などの徴収記録が必要となり、文字が発明される。黄河文明で発明された漢字は神の意思を問う占卜用の甲骨文字を起源にしていることが分かっているが、メソポタミア文明やエジプト文明の場合と同様に最初は象形文字、すなわち表意文字として生まれた。メソポタミア文明やエジプト文明の文字はその後滅び、後進の新たな文明の下で、その一部を活用する方法で表音文字に発達して、使用されるようになる。漢字はよく見ると、「美」や「善」など好ましい意味の字に「羊」があり、牧畜民との交流の中で生まれたのではないかと思わせるところがあるが、記録のための手段として漢字を発達させたのは黄河文明を担った農耕民である。その表意文字がそのまま今日の中華文明でも使われているという点で、中華文明は他の三つの文明と異なり、文明の連続性の証明となる。黄河文明の周辺には農耕民によって築かれた文明が多数あった。戦争によって広がった文明圏の下で、異なる語系語族間で唯一の意思伝達手段として、表意文字の漢字が使用され、それが交信のメディアになったと思われる。

二・「国家」に代わる「天下」

黄河文明以外の他の三つの文明は、異なる発展をしている。三大文明の生まれた地域周辺では、その後、発展した後進の文明が現れ、やがて同じ宗教、同じ言語、同じ生活文化を共有する民族が、それぞれに、それぞれの権力の下に国家という生活共同体を作り上げる、国家文明とも呼ぶべき段階のものになる。つまり共通の宗教や言語をもつ生活集団がなわばり(境)を作つて、その境の中で生活するようになり、複数の国家が共存する「国家文明」が生まれた。そして国家同士は共存していくようになる。その境が国境であり、国境をもつて宗教や言語の異なる生活集団ができあがり、それらが共存して別々に暮らすことができるようになる。その分だけ争いが、つまり戦争が、少なくともすむようになるのである。が、黄河文明を発祥の原点としている中華文明では、国家という観念はなく、したがって国境もなく、その代わり、その文明を主宰する天子が支配する天下という観念の下に、統治する地域はその天子の力しだいで伸縮自在のものとなる。

天子の力次第でどこまでも広がる天下の下では、国境という観念はほんらい生まれにくい。メソポタミア文明やエジプト文明やインドス文明の場合も、それは農業可能な特定の地域に生まれた巨大な文明であり、周囲にそれと同等な文明はなく、したがって、ここでも国境というものを明確に観念する必要がなかったであろう。やがてその文明は衰退し、消えていき、遠からざるところに新しいさらに進んだ文明が誕生した。ただ、黄河文明を起源とする中華文明の場合だけは、限りなく支配の地域、つまり天下を広げていくことによって滅ぶことがなく今日まで続くと続いた。それが中華文明である。中華文明は古代文明と同様に、天子と天下を骨子とし、原則として国境を持たない存在であるため、その後地球全体に現れた国家を作つてもに平和裏に共存するという「国家文明」に対しては、異質な存在となつてしまった。歴史の上で厳密に見てみると、法的に、正式に国境を決めたのは、ドイツ三十年戦争の終結に締結された一六四八年のウエストファリア条約である。そのときスイスとオランダの独立も承認された。

今日は、すべての国は国境を定めて、国家と国民がその国内にしていることになつては、中華文明の担い手の中国は、国際関係の下でやむをえず国境を持つてはいるものの、本来は、力によつて支配できる場所はすべて天下なので、天子の力が強くなれば、その支配地域は当然広がるものであり、国境があるとしても、それは天子の強さによつていかようにも拡大してよいということになる。これが「天下王土に非らざるものなし」という「王土王民」思想となる。

現在の中国は中国共産党の一党支配によつて成立しており、一自然人たる天子による支配という形からは脱皮している。が、天子に当たる中国共産党というボスが強くなれば、かつての天子と同様に、支配地域は広がり、支配する民、人民は多くなるのは当然と考えている。「世界革命、人類解放、国家死滅」というコスモポリタンの社会主義思想と同源であり、「易姓革命」にもつながる考えである。この考え方は、黄河文明以来の考え方をそのまま引き継いだものであり、現在の中国も拡大するのは当然のことと考えている。現在の中華文明を担つてはいると自任

する中国共産党は、その考え方が古代中国に発祥した黄河文明から本質は少しも変わっていないのだ。

儒教の主張によれば、道徳ある「有徳者」が天命を受け、天子となって、天下万民を統率するというが、中国の天子にそういう有徳な者は存在しない。開祖の天子はたいてい「馬上(武力)天下を取る」だ。明君、名君と言われる者でも、たとえば唐の太宗、明の成祖などは父母兄弟など一族、親族を殺してから天子の座にのしあがった。極悪非道な者しか皇帝になれないのが真実だ。

毛沢東が言った「銃口から政権が生まれる」という俗諺のごとく、中国は、戦争立国の国であり、戦争なしには中国が存在しない。

そうした中華文明を支える人間への教えである儒教が、「天下」の考え方とどう関係にあるか考えてみよう。儒教の教えそのものは、観念的には「天子」の下で、民、人民が平和に暮らすことを求めたものであり、天子の使命は平和を築くことであつた。だから理念的には平和のための思想である。

だが、天子の下での儒教は、その巨大な文明の外に存在する、文明を持たないことになつて「夷狄」という野蛮人の存在は考えない。天下の中で孔子の説く儒教は、黄河文明の生まれつきの、まだそれほどの戦乱の記録のない祭政一致の時代を理想とし、それゆえに礼を強調した。その教えは天下の中では平和の教えとして矛盾はなかつた。が、天下の外では、人間はず

べて野蛮人とされ、儒教の理想を享受する資格のない人々とされる。だから自由に殺傷してかわまない人々となる。それがいわゆる「華夷」思想である。

要するに、巨大な文明の下で生活している者からすれば、天下の外の野蛮人は生きていく保証を与える必要のない存在となる。明末の大儒学者王夫之は、「夷狄」は「禽獸」だから、人間の「仁義道徳」は通用しない、だから、殺しても「不仁」とはいえず、裏切つても「不信」や「不義」とはいえない。もともと好戦的な騎馬遊牧民の攻撃にさらされ、殺し合いの戦争が日常化されている状況で、外の野蛮なる夷狄に対しては、必要であればいつでも殺してもよいという前提を置いている。外人の「夷狄」に対するジェノサイド(大量虐殺)は、「天誅」と陽明学が正当化している。つまり、天に代わつて不義の夷狄を討つのである。

儒教を最初に説いた孔子は聖人とされながらも、人肉を好んで食していたと言う人がいる。私は孔子が人肉を食していたとは断定できないと思つてはいるが、もし孔子が人肉を食していたとすれば、人肉が野蛮な夷狄の人肉であれば、禽獸の肉として食していたということになって、矛盾はなくなる。じつさい中国の「正史」にも「夷狄」の肉を獸肉として文明の支配人に喰われた記録が多く残っている。「南史」と「梁書」「倭人伝」に「海人」の肉が美味しいということが謳われている。

そもそも孔子はししお(醢)が大好物だつた。ししおは保存食であり、人肉を使用しただとは限らないが、孔子の時代には人肉嗜食が流行つていた。孔子がその大好物を止めたのは

愛弟子の子路しよが殺され、ししびしおにされ、孔子に贈られてからだった。

儒教は孔子、孟子の後、一二世紀の朱子の朱子学、一五世紀から一六世紀にかけての王陽明の陽明学のように復活（ルネッサンス）して新儒教になったが、それでも天下の外の者は野蛮人として殺してよいという前提があった。いわゆる「天誅」の思想である。日本人に深い影響を与えた陽明学ですら、中華文明の中では、そのような前提が当然のごとくあった。

三、中華文明の中核となる戦争の意味

自然界において、強い動物が弱い動物を捕らえて殺して食すとき、そこに正義も不義もない。その捕らえ方によつてに巧妙な騙しが入っていてもそれは卑劣な行為ではなく、むしろ巧みな行為として褒められる行為であり、悪でもなければ、不義でもなかった。

ほとんどの動物は仲間同士では殺し合わない。だが種によつては仲間を殺し共食いをするものもある。種によつては自分の子供であっても殺して食べるものもある。それらが本能に基づく限り、やはりそれは悪でもなければ不義でもない。

人間の場合、通常では人を食すことはなく、少なくとも共同生活体の中での共同生活においての殺人は悪行であり、犯罪として扱われる。

問題は集団同士の殺し合いである。食糧の尽きた集団と食糧をいまだ蓄えている集団が隣接しているとき、食糧の尽きた集団が、その生存のために食糧を蓄えている集団を武力を持って襲い、食糧を奪い、必要であれば相手のその集団の者を殺す。つまりは殺し合うことを前提として集団間の戦いが起こる。これが戦争である。

人類の文明としては、この戦争をできるだけ抑制するように発展していくか、それとも戦争によつて抑制のためのいかなる論も立てず、無制限に放置して発展していくかの分岐に立つことになる。

国家を形成し、国境をもつて地域別に生活するところの、私の造語である「国家文明」の下では、戦争を抑止する方向に進む。しかし天子が天下を取るための戦いが戦争である文明の下では、戦争は国家のためのものではなく、天子が天子になるための戦争であるから、際限がない。国家による戦争は、国家が共存することを前提とした戦争であるから、そこに戦争を回避する、あるいは犠牲者を少なくするように抑制が働いてくる。つまりは強き者も弱き者も共に従わなければならない法や規則ができてくる。

しかし天子、天下の文明の下では、強い者は、あるいは勝った者はいかなることをしてもよいという自然のルール、いわゆる「ジャングルの法則」がそのまま適用され、戦争はその支配者たる天子になるためのものであるから、あらゆる手段が許され、戦争は限りなく残酷なものとなっていく。

負けた者は抵抗する物理的手段をすべて失っているがゆえに、戦争で勝った者は、負けた者

を全員殺すことも自由にできる。たとえば戦国時代に、秦と趙との「長平の戦」で趙の投降兵士は一夜で秦の將軍白起によって四十余万人が穴埋めにされた。秦が天下を取った後、秦末の天下大乱で、秦兵も「新安」で楚の霸王項羽によって二四万人が穴埋めにされた。戦争を抑制する論のないところでは、勝利するためには役立ついかなる手段でも使わなければならない。自然界のルールと同様に、そこに正義も不義もなく、戦争は結果として限りなく残酷なものになる。

このような戦争が頻発すれば、共同体内の正義も十分に守られなくなる。中国で約二千五〇〇年前、孫子という者が書き残した兵書『孫子』の最初に「兵は詭道（欺くやり方）なり」という言葉がある。戦争は生き残るため避けられないことであるから、そのためにはすべてが許されることになり、通常の道徳は死滅するという意味である。

たとえば、中国に存在する城を囲んでの戦争、いわゆる「籠城戦」で、城の中にいた者が食糧も尽き敗北を認めて降伏しても、勝った側に余分の食糧がなければ、降伏した者を穴埋めにする等で全員殺すことになる。城が破られると城民が皆殺される、いわゆる「屠城」である。「屠城」の行事化についてだが、「南京大虐殺」やら、「長安大虐殺」「洛陽大虐殺」など、帝都の大虐殺（屠城）は古代から中国戦史によく見られる「行事」になっている。そのとき殺される側はすでに抵抗する手段をまったく持っていないから、殺されるままになるほかはない。とすれば、食

糧の尽きた城内では、降伏できない。そこで老人、子供、女と、弱い者を殺して食していくことになる。中国史に記録されている人間の共喰の史例一千八例の中で、籠城戦に見られる史例は二二六回にもなる。

農耕民がおり、食糧を蓄えており、その北方に夷狄という騎馬遊牧民がおり、そこから絶えず戦争を仕掛けられれば、戦争はもともと正義の存在するところではないから、勝つためにあらゆる手段が使われ、戦争はとめどもなく残酷になる。

そして戦争に負けた側は、生き残るために、さらに別の農耕民を襲う。勝つためにすべての手段を使い、戦争はその度により残酷化し、残酷な戦争の地域はどんどん広がっていく。

中華文明は、黄河の中下流の中原に発祥した黄河文明が、その北方の騎馬遊牧民によって襲われ続け、戦争が常態化し、それが中国大陸全体の農業文化圏に広がってできたもの、と総括できる。

戦争の手段たる武力を動かさしめる立場に立った者を、均しく天子と呼べば、天子は動かす武力の強さに応じて支配する天民、人民（生民とも呼ばれる）を増やしていく。強くなれば強くなるほど支配する地域は広くなり、支配する人民の数は増大する。

西洋文明を中心として、世界の歴史を鳥瞰すれば、メソポタミア文明やエジプト文明、インダス文明が滅び去ったあと、この近辺でできた新しい文明は、国家を作り、国家は例外が多々あるものの、原則は宗教、言語、人種を共通にする国民によって構成され、国民には権力によつ

て侵されない公平、公正の正義、つまり権利が認められ、国家は国民の生命と財産を守ること
を使命とし、そして国家と国家とは互いには主権を認め合い、国家の自治を認めあう。そして
強い国家も弱い国家も共に従う国際法が発達し、戦争は抑止され、全体としては戦争犠牲者は
少なくなる。戦争が残酷で非道なものであるゆえに、何とかそれを抑制する方向で発展した文
明は、こうした複数の国家が共存する「国家文明」ということになる。

もちろん、国家は時代によって「都市国家」「封建国家」「国民国家」とさまざまな「かたち」が
あり、中国大陸も「戦国七雄」や「五胡十六国」「五代十国」など国家時代と言ってもよいものが
あった。しかし、中華帝国の歴代王朝は、漢人、華人が、ホームランドの中原から追われた後
は、その主役は、約二千年にもわたって、夷狄が主役になり、そのほとんどが「天下」「天下は一
つ」を志向した。

ヨーロッパ文明は、ローマ法の下、万民が権利を持っているという認識を持って発達したが、
一六四八年、長く続いた戦乱を終息させるため、ウェストファリア条約を結んだ。これによつ
て各国は国家としての権利たる主権を大きい国も小さい国も平等に認め合い、国家と国家の間
係は国際法に基づくべきものと考えられるようになった。そしてそのことによつて戦争を抑制する
ことが可能になったのである。これにより、人類の文明たるべき「国家文明」がはっきりと形を
現わしたのである。

特に国民国家の時代になってから、国家文明が今日の世界の趨勢うしろせになったが、中華文明だけ

は、端的に言つて、国家もなく、国民もなく、国境もない、人類の文明としては異質なものとし
て二一世紀の今日に残っている。「国家文明」と、「天下」との最大の違いは、前者は国家と国民
との間に、「権利と義務」が法的に規定されており、民意を問う制度やシステムが確立され、国
と国との間には国際法があり、後者にはそうしたものが無いということである。

四、論理的に破綻している易姓革命の政治理論

黄河文明、中華文明で、天下を束ねるのは天子たる皇帝である。天子は理念的には、天下に秩
序をもたらし、天民、人民への恵沢けいたくを生み出す存在である。したがって、理念的には天下の万民
を幸せにする、最高の有徳者ということになる。しかし、天子になるためには、戦争に勝ち抜
き、覇者とならなければならない。その登極競争（トップ争い）は戦争である以上、通常の意味
での有徳者が戦争に勝つことはありえない。道徳を無視し、「兵は詭道なり」ということで詭道
を実行し、武力によつて極悪非道の覇者とならなければならない。「殺し合い」は一家一族も例
外ではない。

戦争の過程では危険はいくらでもある。武力による鬭争の真つ只中ただちゆうにいる天子はつねに危険
の中にいる。中国の歴史を顧みて、天子たる皇帝になった者は約二〇〇人いるが、そのうち、三
分の一は天寿を全うしていない。さらに同じ文明圏の朝鮮半島では歴代王朝の国王は生存率は

もつと低い。約二人に一人が非業の死をとげている。そのような危険に囲まれ、それを克服して皇帝の地位を得ているのであるから、皇帝への道は悪徳の道でしかない。天子による易姓革命の理論は人類のための政治理論としては、根本的に矛盾があると言える。人類の幸福につながる政治理論である。

「易姓革命」とは、天子が徳を失ったとき、次の新たな天子が現れて徳の政治をするということと、天子が交代するという政治理論である。言葉の意味としては、姓を易かえて天の命を革あらためるということである。群雄並立競争の中で、群雄をおさえ、最終的に勝てる天子こそ、真に天命をうけた「有徳者」として「真命天子」とも称される。紀元前四世紀から紀元前五世紀に生きた孟子まうしによって唱えられた政治理論である。孟子が儒教に基づく平和で安定した天下を築こうとしたとき、すでに中国では武力による天子の交代の歴史があり、これを受け入れて「易姓革命」という政治理論を構築せざるを得ず、易姓革命の政治理論は避けられなかったと一応は言える。

易姓革命の理論ではいかなる王朝もいつかは滅びざるをえないということを前提にしており、中華文明の下ではすでにそのように現実が展開しており、ある程度は仕方ない政治理論である。だが、この政治理論の下では、誰でもどのような手段を使ってもともかく戦争に勝ち抜けば天子になることができる。したがって、戦争は限りなく残酷になる。

唐を滅ぼし、梁王朝を開いた朱全忠しゅぜんちゆうという人物は、もとは黄巢かうさうという大盗賊(現在の中華人

民共和国では農民革命の英雄として歴史博物館まで建てられて祀まつられている)の配下であり、黄巢に従って黄巢の乱を起こすわけだが、官軍の前に黄巢が危険になると黄巢をあつさり裏切り、官軍について黄巢を討伐した。その功で唐の皇帝より朱全忠の名前を与えられたが、最後は唐を滅ぼし、自ら梁王朝を開いた。

漢王朝を開いた劉邦りゆうぱうも、明王朝を開いた朱元璋しゅげんしやうも、じつは字も読めない、街にうろつくのんだくれにすぎなかったと言われる。二人は運よく皇帝になるや、皇帝になるのに功を尽くした配下を肅清し、多くの者を無実のままに殺した。特に朱元璋の場合は、単に殺したい功臣の一族郎党だけではなく、功臣の同郷の者も殺し、結局は約五万人かそれ以上の無実の者を殺した。

結果的には強い者が勝つ、勝てば負けた者に対して何をしても許されるということになる易姓革命によれば天民、人民は、その天子が勝つて天子になるまで、いかに苦しい目に遭うことか。そして天子になった者は武力によって勝ち抜いた者であるゆえに、何をしても許されるというその恣意性によって、またどれだけ危険な目にさらされなければならなくなるか。じつは現在の中国では一党支配の下、依然としてこの政治理論で動いているのである。

「易姓革命」理論はそれなりの限界があるはずだ。すなわち六朝以後の中華世界は「五胡」をはじめ、約二千年近くにもわたって夷狄優位の時代であった。にもかかわらずモンゴル人の大元たいげんやら満洲人の大清たいしんに征服されても、それでもそれを「易姓革命」と言い張ること自体、この政治理論は人類を不幸にする政治理論ではないだろうか。

五、「民」「人民」の通性

中華文明の中で、「天子」の下、「天子」の支配を受ける「天民」「人民」はいかなる特性を身につけるか。

天子はいかなる手段を使っても戦乱に勝ち抜いた者がなるといふ「易姓革命」の政治理論の下、民の安寧を顧みる余裕はない。戦乱を勝ち抜くために少しでも必要であれば、いつでもどれだけでも殺戮する。何らかの利点があれば別だが、当面の敵と戦うためには人民の存在は何ら利がないから、無視し、必要であれば平然と殺戮し、または生民が死ぬのを放置する。

天子に徳があつて戦争のない場合でも、天民は飢餓、疫病等で土地を離れ流民と化し、それが天下大乱の原因となる。それだけではない。どのような状況でも戦乱に勝ち抜けば誰でも天子になれるということであれば、飢餓や疫病の混乱の中で、新たな者が天子になることを目指して戦乱を起こす。

梁啓超の言うように、民、人民は、虐殺される「戮民」と呼ばれる。現代中国においても、正確な意味では「国民」は存在せず、歴史的に見ると、「国家」とは関係のない「戮民」あるいは「天民」「生民」としてしか存在しない。

地政学的に見ると、中華世界は北に万里の長城があつても、遊牧民の南下を阻むことはでき

なかつた。南に長江という天険があつて、それを越えるのはほんらい難しいことなのだが、その天険と言われる長江の水防があつても、北方遊牧民の南下を防ぐことはできなかった。漢末になると、漢人のホームランドにはすでに夷狄が外国人労働者として大量に移住しており、三国時代以後になると、中原の地の農耕民は華夷半々になつていた。五胡十六国の時代に中原は夷狄の優位が確立され、隋唐の皇帝はトルコ系（鮮卑、突厥）になり、約千年前の宋の時代になると、長江以北の地はモンゴル系契丹人の遼、ツングース系女真族人の金、西北はソグド人の西夏の地になつてしまった。モンゴル人の大元は長江を越え、長江以南の江南も呑み込んだ。女真系の満州人は広がつた中華世界を中心に中国大陸を約三〇〇〇年近く支配してきた。五胡十六国の時代から約二千年近くにもわたつて、中国では二〇世紀初頭まで、夷狄が優位を保つていたのである。

黄河文明を担つた中原の華人、漢人は、約二千年も前から遊牧民によって南へ南へと追われ、時代とともに長江の南の「江南」へと入つていった。

原因は自然災害であれ、このような地政学的や生態学の問題であれ、戦乱によるものであれ、流民が出てきたとき、あるいはそれ以外の原因で流民が生じ、社会の秩序が崩壊したとき、新たな天子になるために、いかなる資格も問われることなく、そして天民、人民にいかなる配慮もする必要はなく、ただひたすら戦乱を勝ち抜くことによつて天子は誕生するものであるとすれば、民は天子から全く見捨てられた存在となる。

前述の清末から活躍した梁啓超の言うごとく、中華文明の下での天民、生民、人民は、天子たらんとする者によつて気ままに殺される「戮民」なのである。このように考えれば、現在の中国人は、殺戮を免れた「僥倖な生き残り」だということになる。

このような悲惨な状況を潜り抜けてきた民はどのような性質を持つに至るか。古代から現代に至るまで、中華文明下の天民、人民は従順で「平和愛好」と自称することのできる者ではないが、しかし大勢が決まれば、実によく「順民」になりたがる。あるいは「奴隸」になりたがる。中華文明の下、天民、人民がいかに「奴隸」になりたがるかについては、私がかつて出版した『驕れる悪夢の履歴書』(福昌堂 二〇〇五年)の中で細かく論証したとおりである。

近代中国文学の父と呼ばれる文豪の魯迅は私以上に単刀直入で、中国史の時代区分は、①奴隸になろうとしてもなれなかつた時代と②しばらく奴隸になれて満足する時代と二分すれば充分だと主張している。

中華文明の下での漢人は人数だけが多いが、たいていは僅少の数の夷狄に数十年、数代、あるいは数百年にもわたつて支配されることを甘受してきた。匪賊であろうが、夷狄であろうが、すぐに順応迎合するのである。乱を少しでも少なくするために民の作り上げた天民、人民の性格であろう。

敵が絶対的に優位に立つておれば、勝てない戦争を戦つて死ぬのは馬鹿馬鹿しく、競つて投降するのが常である。当時優勢であつたモンゴル軍が長江上流から下つて江南に入ったときな

どは、南宋の軍民は挙つて熱烈歓迎した。満蒙八旗軍が北京や南京に入城した際も、文武百官および市民が挙つて「大清順民」と家家に黄紙を貼り、香を焚いて熱烈歓迎した。敵側が破竹の勢いを見せれば、直ちに全員が降伏するといつてよいだろう。

明末に満州人の君臨に反抗して明の復興に励んだ烈士、黄道周は、漢人の建てた明を守ろうとして、「反満の英雄」だった。後に抵抗むなしく逮捕されて連行される途中、村々は新年を迎え、お祝い気分であつた。村人は着飾り、新年を祝つていた。黄道周が役人に連行される途中、少し前まで明の民だった村人が役人に「あいつは何者だ」と聞いた。そして「天子に反逆した罪人だ」という答えを耳にした。そのとたん村人はわつとたかつて、その民族の英雄を罵倒し、石を投げつけたのである。

農耕民の築いた黄河文明から発展した中華文明の下では、常に「華夷」思想を持ち、文明と野蛮とに分ち、華を同心円の円心として東夷、南蛮、西戎、北狄は野蛮人と見なす。歴史から見て、中国では二千年前から、いくら北方に万里の長城を築いても、中原の漢人が五胡に追われ、そしてモンゴル人の大元や満州人の大清に支配され、「家奴」として、遊牧民から逆に「蛮子」として植民地のように統治されても、喜々として甘受する。このことを魯迅の言葉を借りれば、「しばらく奴隸になれて、喜んでゐる」、そしてある程度は安心感を得ているということになる。「太平の犬になつても乱世の民にはなりたくない」というのである。

そのような過酷な歴史を経てきた民、人民は、災難が自分の頭に降りかからぬことにのみ関

心を持ち、これを「明哲保身」と呼ぶ。さらには他人の頭に降りかかっている場合はこれを楽しむというようになっていく。他人の不幸を喜ぶメンタリティは、中国では「幸災樂禍」と呼ぶ。残虐に殺されていた民がいざ殺す側に回ったとき、その残虐さは異民族によつて殺される場合と同様か、それ以上なものになる。

最近「新しい歴史教科書をつくる会」で『通州事件』というブックレットを発行した。昭和十二年（一九三七年）七月二十九日、中国の通州で起つた日本人殺害事件であるが、保安隊のほかに教導総隊という学生が、この虐殺に参加していた。兵隊ではない学生が兵隊とともに残虐行為を喜々として行っているシーンを記録している。漢人による異民族ジェノサイド（大量虐殺）について、モンゴル人、チベット人、ウイグル人に対する残虐な殺し方が、よく写真で告発されている。このようにそれは決して「倭人」に対する「通州事件」の史例だけではない。中国人は「財・子・寿」を最大の幸福と考え、「百子千孫」が最大の願望になっているので、今でも「滅門」（一族の皆殺）が多い。史例としては異民族に対しては、男性なら睾丸を切り取り、女性なら子宮まで引き出す。子孫まで滅する怨念からくるものである。去勢された有名人は、歴史の父とされる司馬遷や今では中国の誇りとなった色目人（中近東出身）イスラム教徒の鄭和らである。

孫文が中国人は「平和愛好」といつも口にしてきたが、毛沢東は本音を言っていた。毛沢東は「それは嘘だ。実は戦争大好きで、自分もその一人だ」とむしろ自慢していた。

「武の国とは違つて文の国だから、平和愛好の方が正しい」と口にする現代中国人は少なくなっている。しかししたいの華人系の国へ行くと、テレビ番組は日常生活の番組でも、男女の関係なく「打！ 打！ 打！」（殴れ！ やれ！ 殺せ！）と叫ぶシーンが多い。そのため日本からの観光客やビジネスマンからは「怖い、もつと愛情番組とか、良いものはないのか」という注文が出てくる。

二千余年も前に秦、漢が天下を統一した当時、人口と自然とのバランスはすでに崩壊し始めていた。あの時代、黄河南岸の地域は人口が一つの郡だけでもほぼ一〇〇万人を超え、過密状態の中で、一平方キロメートルの平均密度が、七〇〇人を超える郡もあった。このため自然から逆襲されると、すぐに飢饉となり、社会争乱の原因となった。

社会争乱がつづく中原の地では、後漢の黄巾の乱から三国時代に入ると、白骨が山積み、千里に人煙がなくなる、という荒れた状態になり、三国時代の人口は盛期の約八分の一にまで減つたと言われる。中原は過疎地帯となり、北方や周辺から強健な遊牧民が移住してくる。晋の時代になると華と夷の人口は半々となる。

遊牧民に追われた中原の原住民は南下し、さらに長江を越えて南下した。そして現在は世界に拡散している。南下し世界に拡散した民は、自然との共生という観点が欠如している。そのため地上資源を食いつくすだけでなく、地下資源を無造作に掘り起こし、海では魚や海亀を取つてくし、海底の赤サンゴまでさらっていく。

戦乱が常態化した社会では、いつ何時、悲惨な目に遭うかもしれない。だとすれば今得られ

る利得は、今受け取らなければならぬ。たえず理不尽な死に見舞われて、恐怖におののきながら生きるのであるから、現在得られる利益を現在得なければならず、それだけが関心の的となる。

理不尽な死にいつ遭うか分からないような状況の中で生きていて、今度は自分が強い立場に立てば、強さを背景にしていかにようにも加害者となる。現在、中国人民が横暴となり、世界が要請している規制を守ろうとはしないのは、この強い立場の特性が出たものだ。魯迅は「暴君治下の臣民は、たいいてい暴君よりさらに暴力的である」、「暴君の臣民は、暴政が他人の頭上にだけ振るわれるのを願ひ、彼はそれを見物して面白がる。『惨酷』を娯楽とし、『他人の苦しみ』を賞玩し、慰安するのだ。その本領はただ自分だけが上手に免れることだけだ」と言う。「中国人が不機嫌」とか「中国人が怒るぞ」とか「中国はすでに強くなったから、これからの世界は中国人が決める」などの出版物や世論が出るが、これらは中国人のメンタリティを物語るものである。

現在の国家権力である中国共産党政府は、人民のこうしたところを自制するように指導すべきなのに、人民と一緒にあって、強者の論理に立っている。

ただ、私は、中華文明下の民、現在の中国の人民のこのような性格は、歴史的に形成されてきたものであり、生物学的なDNAの問題ではないと、一応は思いたい。

このような民、人民の通性から敷衍して、いわゆる日中戦争当時の中国の兵士がどのような通性を持つに至るか、ついでに見ておこう。

中国には国家という観念がないのであるから、国民という存在がなく、原則として、愛国心というものはない。極論すれば単に強いものに従っているだけであり、他人のために守ろうとするものがないから、訓練にもまじめに取り組もうとはしない。自分の意思で死を掛けた行為はしない。逆に自分たちが強い立場にあると思うときには横暴になる。だから中国軍では、後方に逃げて還ろうとする兵を戦場に追い返す督戦隊が必要となってくる。後方に督戦隊がないと兵は皆逃げてしまう。

戦闘中、自軍が少しでも不利になれば兵は逃亡を始める。または降伏し始める。逆に自軍が有利に展開する見込みがあるときには、激しく戦う。自軍の勝利がはっきりすれば、限りなく攻撃する。しかも残虐にである。

支那事変当時、日本の参謀本部が『支那軍の特性』なる冊子を発行した。中国兵は自己中心で責任感が弱く、一般には死力を尽くして戦うことはない。

が、例えば、

①利益に向かう時、例えば賞金が貰えたり、財宝を掠奪できる時

②相手が弱いと見える時

③死地に落ちいった時、

などでは死を恐れず強く戦うとした。

また、群衆心理に弱く、流言蜚語りゅうごんひごに弱く、形勢不利となると潰走かいそうし、指揮官が部下を捨てて潜匿ひそかくすることがあると述べている。昭和十二年（一九三七年）南京が陥落した際の司令官唐生智とうせいちが南京に籠る部下を置いて早々に逃げたのは、この典型的例である。戦う前に「死守」を公言した蒋介石夫妻は真つ先に逃げ、その後を追って参謀総長の何応欽かおうきんも逃げてしまった。

日本が戦争に負けて中国大陸から去った後、国民党軍と共産軍が戦ったが、共産軍がソ連の支援を受けて少し優位になったとき、雪崩ゆたれを打って国民党軍が共産党軍に寝返ったのはこの例である。

ところで今日の中国軍の兵士はどうであろうか。現在の中国共産党の一方支配を受けながらも、内戦状態にはなく中国大陸を統一して支配しているゆえに、国境もあり、国家の体を曲がりなりに呈しているゆえに、愛国心なるものを持つ環境が整っている。ゆえに、中国兵士にも愛国心は芽生えているものと思われるが、要は自分たちが強い立場にあると思つたときの驕りとしての愛国心であろう。基本はやはり昔の中国兵と同じではないか。また、中国人民解放軍は制度的に国家のための国民軍ではなく、中国共産党を守るための私的軍隊であると言えるから、その分愛国心は弱くなるだろう。平成二十八年（二〇一六年）秋の駐南スーダンの中国人民解放軍のPKO部隊は、押し寄せる難民の群にパニック状態になり、保護しないばかりか、難民に催涙ガスを撃つて、陣地を棄てて逃げてしまふといういたらくで世界のもの笑いになった。

六・近代国家の「国家文明」との比較

先にも簡単に述べたように、「国家文明」を作り出したともいえる西洋文明は、古代ローマ文明において、「権利」なる法概念を生んだ。ローマ市民である以上は、権利を平等に享受し、生存権を保障されるものとなった。「権利」を中心に法治主義の観念が生まれた。

ローマ法はやがて万民法となり、全ての人間が権利の主体となり、全ての人間が国家によって生きることを保障される存在となった。

それを前提に、宗教、言語、人種等を共通にする人たちが、つまり気の合う人たちが、国家を形成し、国境を定め、平和共存することに価値を見出す「国家文明」を作った。

先にも触れたように、史上初めて国家の領土範囲が決定されたのは、一六四八年にドイツの三十年戦争後に制定されたウェストファリア条約による。長年にわたる独立戦争を経て、オランダのスペインからの独立も、スイスとともに同条約で独立が承認された。国際法が強く意識されるようになり、戦争は外交の延長である、と限定的に考えられるようになった。二〇世紀に入ると、陸戦法の条約も作られ、戦争は勝敗が決まれば終結させ、犠牲者を極力少なくするように発展していった。もちろん現実には違うこともあった。特に第二次世界大戦では、勝利した連合国はこれら国際法を言葉で尽くしがたいほどに破った。しかし戦後、少なくとも戦争

に勝った連合国の中心となったアメリカは、勝てば何でもできるという姿勢は見せなかった。実態は茶番であったけれども、東京裁判という裁判を開廷したことは、勝利した者は何をしてもよいという論理ではなく、法に従わなければならないという観点からであり、国家文明の論理に則っていた。

戦争に勝っても、負けた国民に対して人権を認め、人々は平和裏に生活すべきであり、戦争は抑制されるべきものという文明の論理は残った。権利と法の支配は人類にとって大切な文明である。

そうした国家文明の中で、中国文明のみ、いまだ黄河文明以来の天子・天下の文明のままである。二〇世紀に入った中国は、辛亥革命が起こつて、国民国家の国造りを目指したが、未曾有の天下大乱という「カオスの状態」に陥ってしまった。帝国から民国、そして人民共和国、同じ人民共和国でも毛沢東の人民共和国と鄧小平以後の人民共和国は政体がまったく異なる。なぜ国体が三転四転するのだろうか。それはそもそも中国は天下であつて、国家ではないので、むりやりに天下を国家にするのは、逆に騒乱を起こすのである。

繰り返しとなるが、中華文明たる現在の中国文明を、近代国家を作り上げた欧米の文明と比較してみよう。

欧米の文明の下で生まれた近代国民国家は、原則としては特定の宗教や言語、風習等、特定の文化を共有する人々の生活共同体であり、その生活共同体の別名こそ国家であるが、その国は国民の生命と財産を守ることが基本的な役割だということを通原理にしている。そして二〇世紀に至つて、国家同士は協調して共存すべきだという共通観念を持つに至っている。つまり欧米の文明では、人々は国家を形成して、平和に豊かに暮らそうという「国家文明」を創り出しているのだ。

そのために国内においては、国家権力が暴走しないように、政治の在り方として三権分立とか、国民の総意に基づいて政治を行う等の、政治の在り方が決められているし、総じて民主主義の理念が国民の間に共有されている。

そしてこれが、戦争を抑止する文明へと導いたのである。

この国家文明に多大な貢献をしたのがローマである。ローマでは、当初はローマ市民のみ享受するものとして自由や権利を根幹とする「ローマ法」が考えられた。が、やがてこれが万民の享受する万民法となった。つまり、ローマ軍の支配を受ける者も、自由と権利の主体として扱われることになった。

ローマも古くは、よく戦争をし、滅ぼした国や文明も多々あり、さらには降伏した民を奴隷として働かせてもいた。

だが、ローマの場合、政治権力を掌握していたカエサル皇帝は、中国の皇帝と違って武力のみによって地位を築いているのではなかった。皇帝は自らの武力によって直接に就くのではなく、元老院の推薦によって即位するものであった。皇帝ネロのように、掌握した権力をかなり

恣意的に使った皇帝も現れたが、帝位は武力のみによつて就く地位ではなかった。

これも、皇帝が恣意的に戦争を引き起こすことを防止した。天民、人民に当たる一市民が、皇帝になるために自由に戦争を引き起こすということはできなかった。

このような国家観がメソポタミア文明やエジプト文明の時代にすでに成立していたとは思われない。原則的にはメソポタミア文明やエジプト文明は、どちらかと言えば、中華文明の核たる黄河文明と同じようなものであったろう。メソポタミア文明にしろ、エジプト文明にしろ、その文明が華々しく存在していたころ、周囲にはこれに対抗する、同程度の文明を開花させて生活している生活集団は存在していなかった。したがって今のような国境の概念も必要としないはずである。古代の巨大な文明は宗教とともに生まれたから、少なくとも初期の時代では、権力の主宰者は祭祀さいしの執行者としての祭主を兼ねた存在であつたであらう。その点で、初期の時代には、その統治に服する天民、生民は、あたかも後年の天子が天民、人民に対して扱つた「戮民」のようになることはありえなかつた。黄河文明でも、伝説の古い時代には王と民とは協力関係にあり、他の文明の場合とそれほどの違いはなかつたであらう。

しかし欧米の文明は、これら古代文明がいったん滅び、その後に発展したギリシャ文明やローマ文明を契機にして、人類文化の普遍性をもつて飛躍的に発展していく。特に国家形成に当たっては、ローマ文明の貢献は大きかつた。

ローマ文明によつて、国家形成に関わる「権利」の概念を築いたことは特に重要だ。どのような共同社会も共同生社会である以上、そこで生活する人々のために共同社会は秩序を持つており、そこに正義や公正の観念が生じる。それを「権利」という言葉で昇華させ、人間の国家的存在の明確な観念としたことは偉大である。しかしこのような「権利」という法的概念は、メソポタミア文明やエジプト文明ではまだ生まれていなかった。

人類の歴史の中で、最も古い法典はハンムラビ法典だと言われるが、これには「自由」に相当する言葉はあつたようだが、「権利」の概念はなかつた。日本は序章で述べたように、翻訳大國で、このハンムラビ法典についてさえも飯島紀いひまきの訳で、平成九年に『ハンムラビ法典』（泰流社）として刊行されていることを紹介しておこう。

「目には目を 歯には歯を」という言葉で有名なハンムラビ法典であるが、このハンムラビ法典には権利の概念はまだないのである。現在の人類の文明に多大な貢献をしたギリシャ文明でも、古い時代にはやはり「権利」という言葉はなかつたようだ。「権利」の概念はローマ法が生み出したもので、ここにローマ文明の残した人類への偉大な遺産がある。

権利は、語源的に、右手という力の象徴と、正義の意味を合わせ持っている。権利は当然満たされるべきものであるが、それは力があつて初めて保証されるものであり、力の存在を前提としている。力がなければ保証しない、力がなければ保証できないということである。その力の保証の根源として、共同社会の別名たる国家が存在している。

「法は作るものではなく発見するものである」というローマ法の究極の法の考え方の下、法と

は任意に制定するものではなく、正義の発見として進化していくべきものだというローマ法の根本観念は、人類の歴史において、どれほど大きな遺産となったか計り知れない。ヨーロッパ中世では、キリスト教の影響を受けて、「自然法」の観念を生み出す。

権利は力によって守られるものであり、その力の提供こそ国家の役割であるという、国家にかかわる基本観念が生み出された。この観念こそが、「天子」と「天下」と「天民」の関係を一新し、全ての国家はまずは国民の生命と財産を保障すべきものだ、という観念を生み出した。それぞれの国家に統治権を認め、それが主権となった。

それでもなお国家と国家との関係は原則的に無秩序だ。国家と国家は時として利益の衝突が起こり、その解決のために戦争をしなければならなくなる。だが、戦争は天子のためのものではなく、国家と国家の争いの解決のためのものである。だとすれば、双方の国の国民に無意味に犠牲を大きくする戦争の拡大は止めようということになる。戦争への抑制が働いてくるのである。

古代、異人種、異文化の文明を持った集団間の戦争では、負けた側は滅び、人々は勝利した側の奴隷となることもあった。しかし近現代にあつては、国際法の観念が生まれ、国家間の協調の必要が認識され、戦争に対して国際法を当てはめ、戦争をできるだけ発生しにくいように仕向けるようになった。戦争が起きても、勝敗が決まれば停止し、できるだけ死傷者を増やさないうような努力がなされてきた。

原爆投下や一般市民を標的にした空襲もされた第二次世界大戦は、必ずしもこのような努力の延長にはなかつた。すでに勝敗の決した段階であるにもかかわらず、東京空襲により一般市民を大量に殺戮し、さらに降伏寸前の段階で、原爆を投下したのは、勝つためには何をしてもよい、強いものは何をしてもよい、ということである。それは天子と天下の関係による無制限の戦争に近く、まさに天子と天下の原始的な戦争に戻ってしまった。

戦争は物理的な強さの競争であり、負けた側は物理的に抵抗する手段を持たず、勝者が敗者の全員を殺害しても抵抗できないという客観的状況の下でも、戦争を限定的なものにする国家文明にあつては、戦争行為としてできることを限定し、戦争の犠牲者をできるだけ少なくし、人類にとって良い方向の発展を明らかにするものであつたにも拘らずである。

原始的な戦争は、二〇世紀で終止符を打ったわけではない。振り返って見ると、自由や権利によつて成り立っている、この二一世紀の人類の文明に、弱肉強食の自然法則をそのまま政治法則にした古代の黄河文明が中華文明に拡大して、今日居座っているのだ。それが中国文明なのである。

中国も、黄河文明の発展たる中華文明から脱却し、欧米の築いてきた国家文明の中に穏やかに入ってくる機会はずつはあつた。

これは杉原誠四郎氏が平成十七年（二〇〇五年）、民主党政権が誕生する寸前に出版した『民主党は今こそ存在感を示す時』（文化書房博文社）で分かりやすく説明しているが、一九八九年

六月四日の天安門事件こそ分水嶺だった。

毛沢東が死に、十年以上の迷走を経て、鄧小平が実権を握ると、経済の開放政策が大胆に推進された。一九七九年、鄧小平は市場経済を取り入れ、経済改革を断行した。しかし杉原氏はこのとき中国の必要なものは経済改革ではなく、政治に民意を取り入れていくという政治改革こそを断行すべきであったと述べている。国政や地方の政治において、いきなり民主主義的な選挙を行うことは難しいとしても、国会に相当する全国人民代表大会に出席する代表を、国民の信任投票にかけるようなところから始めて、徐々に民主的な選挙を行う方法もある。どちらかと言えばそのような方向に向けて指導していた趙紫陽総書記を解任して、一九八九年六月四日、民主化を求める学生を戦車で轢き殺す戒厳令を、鄧小平は発した。

鄧小平は天安門事件の際に、「讓歩すれば、中華人民共和国はなくなってしまう」と言った。じつは、鄧小平は「人民共和国」を云々したが、天安門前の反政府デモ制圧の背後には、鄧一族の利権を護る目的があったのである。天安門前に集まる市民と学生の主張は、建前としては民主的要求としてのものが、その背後には、鄧の長男樸方の康華公司の利権独占と腐敗などに対する反対運動（いわゆる「官倒」反対）でもあったのである。

もしこのとき戒厳令を布かず、民主化の方向へ進めていたならば、領土の拡大や汚職の撲滅で混乱するような中国ではなくなっていたかもしれない。もともと市場経済は、民主的な政治

体制と対になっているものだ。このとき望ましい国家文明の下にあった世界の国々は、中国が民主主義的政治体制に改めていく方向に着手するのを確かめてから、市場経済の経済運営の仲間に入れるべきであった。趙紫陽にはその可能性があった。

天安門事件を見る限り、中国人民より中国共産党政府の方が、中華文明、中華思想に冒されていたと言えよう。

このとき、中国が趙紫陽の目指す方向に向いて進んでいたら、今のような醜い中国にはなっていなかったであろう。鄧小平の罪は大きい。そしてその過ちを許した自由主義国にも大きな責任がある。社会主義史上最大の富豪とされる鄧小平とその一族は、鄧がその世から去ると、その一族の権と利は、上海閥につぶされたが、現在鄧一族は、約一〇兆円（日本円で換算）を巻きあげて、オーストラリアへ逃亡し、孫娘（次男坊の娘）はアメリカ籍を取っている。